平成２５年度 西部中学校　学校便り　第２号

り　ん　ど　う

平成２５年６月２５日 発行

第２回校長講話　トルコと日本を結ぶ絆　～時を超えた友情～

６月１７日(月)の校長講話は，７月に予定されているトルコ・タンプナル校訪問団との交流に向けて，「トルコと日本を結ぶ絆　～時を超えた友情～」というテーマで行われました。最初に田川校長よりトルコと日本の歴史的な関係や，タンプナル校と西部中の交流の経緯を，続いて本校卒業生の上野悠二さんからトルコ交流で学んだことを，そして，上野さんといっしょにトルコを訪問した原山教育実習生からトルコ訪問の感想をお話ししていただきました。

＜トルコと日本の絆＞

明治 23 年に和歌山県沖で起きたエルトゥールル号の遭難時にトルコ人船員を救った日本人。昭和 60 年のイラン・イラク戦争でイランにいた日本人を救ったトルコ人。平成 23 年の東日本大震災とトルコ大地震でお互いが行った支援・救援活動。このように，トルコと日本には深い絆があります。

今回の校長講話は，国際理解教育とキャリア教育の一環としても行われました。本校卒業生の上野さんは，「１年生には西部中のトルコ交流について知ってほしい。２・３年生には自分の生き方について考えるきっかけとしてほしい」と前置きして話を始めました。

上野さんは，平成１８年の第２回訪問の一員でした。ホームステイを受け入れたり，実際に訪問したりした経験から，日本とトルコの架け橋になりたいと思い，大学ではトルコとの交流を行うサークルに所属して活動しているとのことです。

＜タンプナル校と西部中の交流＞

長野オリンピックを機に始まった長野市の「１校１国運動」の本校相手国がトルコになり，イスタンブールにあるタンプナル校との交流が始まりました。

交流は今年で 18 年目となり，今までに本校の現地訪問が４回 （その他に職員が１回訪問），タンプナル校の来校が今回で５回目となります。

「中学校での体験は，自分の生き方に関わってくる」「トルコ交流は１人でできることではない。人と人とのつながりが大切だ」「周りで協力してくれる人への感謝の気持ちを持ちたい」など，交流から学んだことを語ってくれました。この秋には，ドイツに留学し，現地のトルコ人移民や２世，３世との交流を計画しているそうです。

原山実習生は，自分の訪問時にトルコの方々に笑顔で歓迎していただいたという経験から，「７月に西部中に訪問団が来るので，笑顔で迎えてほしい」「最初の出会い，印象が大切」，そして，「西部中のトルコ交流を今後もぜひ継続してほしい」と語ってくれました。

現在，トルコでは暴動が起き，連日報道されています。情勢がとても心配されますが，市民生活は普通で，今のところ予定どおり来日するという連絡が入っています。

７月１７日(水)～１９日(金)の３日間の西部中訪問で，トルコの中学生や先生方と直接触れ合うことができます。今回の校長講話で学んだことを活かし，一人一人がトルコや交流に対する思いを持って訪問団を迎えられるとよいと思います。

平成２５年度 西部中学校　学校便り　第４号

り ん ど う

平成２５年８月２２日 発行

トルコ訪問団との交流

７月１６日(火)から２２日(月)までトルコ・タンプナル校からの訪問団（生徒３名，先生３名）が来日し，西部中では１７日(水)から１９日(金)の３日間，交流を行いました。

交流初日は歓迎紹介式，校内案内，授業交流，給食，２日目は長野西高校のバトン班が演技を披露してくれた校長講話への参加（他に，長野市内見学，教育長表敬訪問），３日目は授業交流，給食，全校交流会・お別れ会（校友会の企画）が行われました。また，生徒３名は受け入れていただいた３軒のご家庭で４泊のホームステイをしました。

短い訪問期間にもかかわらず，校内で気軽に挨拶を交わしたり，声を掛け合ったりする姿が見られました。全校交流会では，生徒３名に浴衣を着てもらい，日本文化（お茶や空手）の紹介や，トルコ語の歌や「この地球のどこかで」の合唱を聞いていただいたりしました。

長野オリンピックを契機に始まった一校一国運動が，学校間の交流としてここまで続いているのは長野市内の小中学校でも多くありません。テレビや新聞の取材もあり，何より，外国の中学生や先生方と直接交流するという貴重な経験ができました。

「私が一番心に残っているのは，初日にやったプールです。背泳ぎでギョクスさんにみんなでコツを教えてもらいました。スピードも速かったし，泳ぎ方がとてもきれいでした。最終日の給食では，初めてイイッさんと話しました。英語の発音がすごかったです。シールさんも手を振ってくれてうれしかったです。この３日間のことは，絶対に忘れないようにしたいです」

（１年生）